

近江における明智光秀家臣団伝承について

井上 優

はじめに

前稿『淡海温故録』の明智光秀出生地異伝と現地伝承について(『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要』第三五号、二〇一九年)では館蔵『淡海温故録』の記述に触れつつ、明智光秀近江出身伝承について紹介した。主としてマスコミ各社からの注目を受け、新聞等の各種記事として報道される(一)とともに、いくつかの光秀にかかる著述や論文等に引用される(二)機会もあり、筆者自身も前稿を要約したり発展させた論考を複数公表する(三)など、一定の社会的な役割を果たせたのではないかと思う。そうした反響の中で、県民の皆さんから近江に伝わる明智光秀関係の伝承について情報提供を受ける機会があった。滋賀県守山市に伝わる光秀の重臣・藤田伝五ゆかりの系譜伝承がそれである。本稿では、その伝承を紹介するとともに、この機会に県内各地に伝わる明智家臣団伝承を集成しておくこととしたい。

一、坂本城跡の近辺に伝わる明智光秀関連伝説

滋賀県内、とくに居城であった坂本城跡(大津市)の近辺には、さまざまな明智光秀関連伝説がある。

まず、著名な伝説として避けられないのが、天海Ⅱ光秀伝説(南光坊

光秀説)である。

信長の焼討ちによる荒廃から比叡山を復興し、徳川家康を東照大権現として祀ることに功績が大きかった天台宗の名僧・天海だが、前半生は謎に包まれている。その正体は、敗死を装って密かに生き延びていた明智光秀その人であるというもの。

語るところは、国家鎮護の延暦寺を焼亡に追いやった織田信長の異常性を恐れて、明智光秀と羽柴秀吉、徳川家康の三名が共謀して信長を討ち果たした。三名の間には密約が結ばれていて交替で天下を取ることとし、まずは弑逆の汚名を着た光秀が秀吉に倒されたように見せかけつつ世間の目を欺いて生き延び、出家して天海となった。ところが秀吉は密約に反して自分の息子に天下を譲ろうとしたので、天海となっていた光秀と家康の二人が力を合わせて豊臣秀頼を倒し、江戸時代を開いたというのである。

この伝説は、須藤光輝『大僧正天海』(富山房、一九一六)や明智滝朗『光秀行状記』(中部経済新聞社、一九六六)などの出版物で紹介されたことを契機に広まったようだ。さらに、早乙女貢の歴史小説『明智光秀』(東方社、一九六一)のち、一九七〇、一九八〇などに再刊)が天海Ⅱ光秀説を全面的に取り入れて書かれたことで、全国的に知られるようになったと考えてよいだろう。

ただし、この伝説の文献的根拠は明らかではない。筆者自身、天海Ⅱ

光秀説を近江坂本出身の父や親族からまことしやかに伝え聞かされたが何時、誰から伝承したのかについて尋ねる機会もなかった。よくできたストーリーであるが史料上の根拠がなく、近世の文献にも書かれていない。もともと地域に伝わった伝承ではなく、近代以降に創作されたストーリーが逆に地域で受け入れられ、流布した可能性も否定できないだろう。

なお、慶長二〇年（一六一五）に比叡山麓の飯室谷に建立された石燈籠に「慶長二十年二月十七日奉寄進 願主光秀」と刻まれているという情報もある。筆者自身、昭和五七年（一九八二）当時に滋賀県立東大津高等学校歴史研究部の活動の一環として飯室谷松禅院を訪ねて確認し、竿部に陰刻銘があり磨滅著しいものの概ねそのように読めることについては認識した（現在は拝観不可）が、「光秀」は僧名である可能性が高いだろう。光秀と天海の筆跡や花押なども全く異なっており、史実として認められるものではない。

この他、明智左馬助光春（秀満）湖水渡り伝説の地として大津市打出浜、同柳が崎の両地と、坂本城跡に築かれた「明智塚」がある。本能寺の変後、安土城の留守居を務めていた光秀の娘婿・明智秀満が、山崎の敗戦を知って坂本城へ帰る途上、馬に乗ったまま琵琶湖を渡ったという伝説で、発地の打出浜（琵琶湖文化館前市道）と着地の柳が崎（柳が崎湖畔公園「駒止めの松」）にそれぞれ伝説地を示す石碑が建立されている。左馬助湖水渡りの話はいわゆる『川角太閤記』（元和年間成立）が初出で伝説としては古いものの、柳が崎の二基の石碑はそれぞれ昭和八年（一九三三）と昭和二九年（一九五四）の銘が刻まれ、文化館前のもはそれよりも新しいもので、いずれも近現代の建立と考えられる^(四)。「明智塚」は坂本城落城の際、秀満が光秀の愛刀や宝器を埋めた供養塚であるなどと伝わるが、いつから存在する塚なのかは判然としない。

総じて、大津市内の坂本城跡近辺に伝わる光秀関連伝説には史料の乏

しいものが多い。もちろん、確かな光秀発給文書や関係文化財を伝える西教寺や聖衆来迎寺、『近江名所図会』に「明智寺」の異名が記される盛安寺などの社寺については城主時代の明智光秀の帰依を受けていたことに疑いがなく、なかでも聖衆来迎寺表門は保存修理の結果、伝説通りに坂本城の旧城門遺構である可能性が極めて高いことが裏付けられている^(五)。

二、近江の各地に伝わる明智光秀家臣団の系譜伝承

明智家の旧臣伝承は各地に存在し、坂本龍馬の系譜伝承などがよく知られるが、近江国内には特に多いといえる。

彦根藩井伊家筆頭家老・木俣清左衛門尉守勝はもともと三河武士で徳川家臣であったが、元亀元年（一五七〇）の元服後、一族の不和が原因で徳川家を出奔して明智光秀に仕えた。そのことは井伊家臣団の正式系譜集である『侍中由緒帳』に記述されている^(六)。木俣守勝はその後、徳川家康から呼び戻されて天正一〇年の本能寺の変に際しては、「神君伊賀（甲賀）越え」の一員として三河への脱出行に供奉した。

賤ヶ岳七本槍の一人で近世大名家を興した北近江出身の武将・脇坂安治（通称・甚内）も、浅井氏滅亡後に織田家に属し明智光秀の与力として丹波攻めなどに活躍している。その後自ら志願して木下秀吉に仕えて播磨攻めに従軍するなど、本能寺の変までに立場を変えていわゆる豊臣恩顧大名として出世していったことについては、江戸幕府の大名・旗本・御家人の正式な系譜集である『寛永諸家系図伝』^(七)や『寛政重修諸家譜』^(八)に明らかなるところである。

さらに、戦国期の近江堅田に勢力を有した有力土豪（殿原衆）・猪飼甚介が元亀元年の堅田合戦を契機に織田政権に下り明智光秀の与力となったことは、『信長公記』、『猪飼家系譜之図』および一次史料などが

ら明らかであり、彼は本能寺の変および山崎合戦で光秀と運命をともにしたと考えられる^(九)。その後の猪飼一族は堅田(大津市)や手原(栗東市)などに在村して由緒を伝えた一族と、幕府代官を経て旗本となった家系に分かれたことについて、高島幸次氏の一連の研究によって明らかにされている^(一〇)。

その他にも、脇坂甚内の親族と伝える東浅井郡加村(長浜市湖北町賀)の脇坂久兵衛家^(一一)、野洲郡水保村(守山市水保町)の藤田彦兵衛家など、滋賀県内各地に広く分布している。

三、木内石亭の実家・拾井家に伝わる光秀家臣団伝承

そうした光秀家臣団伝承のなかで、筆者が特筆しておきたいのが木内石亭の実家である拾井家と野洲郡水保村(守山市)に伝わる藤田家の系譜である。

まず、江戸時代中期に活躍した博物学者・木内石亭(本名小繁、一七二四〜一八〇八)が明智光秀の家臣の末裔であるという系譜伝承について紹介する。日本考古学の祖として知られる石亭は、光秀の居城であった坂本城跡にほど近い近江国滋賀郡下坂本村(大津市下阪本)の拾井家で生まれた。拾井家は山門公人、すなわち延暦寺に仕える武士身分の家柄として北国街道筋の下坂本村の幸神社門前に居を構えていた。菩提寺は明智光秀ゆかりの西教寺である。

江戸前期成立の系図「拾井氏名字分ヶ筋目書置」に、拾井はもと伊藤と称して明智家の家臣であったこと、落城に伴って改姓し帰村したことなどが記される^(一二)。系図は、筆者が栗東歴史民俗博物館の学芸員として企画展「石の長者・木内石亭」を担当した際に採訪したものであるが、図録には写真と解説のみを掲載したため、改めて釈文を示すと、次のとおりである。

拾井氏名字分ヶ筋目書置

拾井氏名字之初り伊藤浄心与申仁初申候、明知殿落城之時節打死被致候、きぼろ拾人之組頭、首帳之高名其外ほまれすくれ、御ほうびとして正宗之刀、其時伊藤拾井与被改置下候、其刀七拾年以前当所火事ニ焼失致候へ共焼刀ハ今ニ残り有之、ゆふしよ書見是焼失被申候由申伝へ候、指替之刀永正助定信国之脇指家ニ伝り、今ニ所持仕候、手鍵壱筋右之通浄心子栄賀請取、此家取立当所町屋ニ住居被致候、

右、浄心子惣領家之初り栄賀

一、栄賀 若名平三郎、下坂本御新地さを請名、七拾才余ニ而相果、

妻ハ築瀬氏、只今ハ堀田長門守様御家来之家

栄賀子宗仁惣領

一、宗仁 若名茂兵衛

七拾才余ニ而相果、妻ハ築瀬氏、右家別 (以下、略)

すなわち、先祖は伊藤浄心(浄心は法名であろう)といい、明智家の家臣で「きぼろ(黄母衣)」衆十人の組頭であったと伝える。黄母衣衆は一般に、織田信長の黒母衣衆と赤母衣衆に倣って豊臣秀吉が選抜した馬廻り衆のことであり、明智光秀のそれは知られていない。ただし、織田政権の中で激しく競わされた秀吉と光秀には類似した行動も多く知られており、光秀黄母衣衆の存在について、疑わしくはあるものの全否定するまでには及ばないだろう。

伊藤浄心は坂本城落城のおり討死したが、敵の首級を多く挙げるなど誉れ優れた武人であり、主君(光秀)から褒美として正宗の刀を拝領(相州伝の始祖である鎌倉末期の正宗作刀のことであろう。名刀の代名詞ともいうべきもので真作は極めて稀である。)していた。拾井と改姓して下坂本村に帰村した浄心の子・栄賀の子孫のもとに、その刀は火災で焼損しながらも伝えられてきたという。ただし、「ゆうしよ書見」(由緒書)

は焼失したとされる。浄心、栄賀の後裔としてこの拾井平左衛門家に生まれ、母の実家である栗太郡北山田村の木内小兵衛家の養子となったのが、木内小繁(号・石亭)であった。

ちなみに、木内家は北近江浅井郡の脇坂久兵衛家から三度も養子を迎えている^(二三)が、その家もまた、明智光秀旧臣伝承を伝える家系であったことは偶然と思われない。江戸時代中期の近江において、名字帯刀を許された士分の豪農(郷土)層の中で、明智光秀家臣団の末裔同士であるという認識が、親族の縁組条件として重視されていた可能性が高い。また明智旧臣団という系譜意識が、遠く離れた地域の間で相互に共有されていたことにも注目したい。

四、守山市水保町に伝わる藤田伝五の同族伝承

さて、近江に伝わる明智光秀家臣団伝承の中でもこれまでに全く知られておらず、とくに興味深い一事例を紹介する。守山市水保町に伝わる藤田伝五の一族にかかる系譜伝承である。藤田伝五行政は明智五宿老の一人にも数えられ、光秀が本能寺の変を決意した際、いち早く打ち明けた重臣の一人として『信長公記』にもその名前が見える^(二四)。『明智軍記』などでは山崎の戦いで重傷を負い、天正一〇年(一五八二)六月一四日、退却した淀で自刃して果てたといわれる^(二五)。

その出自は全くもって不明だが、一般には「美濃衆」や明智の「譜代衆」などとされている。しかしながら、藤田伝五の父については何もわかっておらず、本人が美濃出身であるという史料的な根拠も存在しない。いつから光秀に仕えたのかも分かっていない^(二六)。こうした条件の中で伝五を「美濃衆」とか「譜代衆」と呼ぶのは偏見以外の何物でもなく、その出自は一度白紙に戻して考え直すべきではないだろうか。

そこで、今回情報提供を受けた系譜史料が参考となる。藤田泰夫家に

伝わる「藤田系図」は、記述の下限が明和九年(一七七二)なので、ほぼその時代、十八世紀後半の成立としてよいであろう。

同系図によると、藤田伝五、およびその兄弟で山崎合戦において討死した藤田伝三行久とともに、野洲郡秋富郷(水保村)に天台律宗観音寺を建立した藤田五兵衛尉貞長の子であるとされる。伝三、伝五らを含む貞長の子の中で、惣領は藤田彦兵衛尉貞孝だったようだが、その末裔が現在も守山市水保に住んでいる。系図を示すと、次のとおりである。

藤田系図

藤田三河守

貞近

文安三年戊酉二月十二日没 法名 梅後盛春禪門

従四位佐々木氏綱公幕下

貞時 藤田修理太夫

寛正四年癸未九月廿八日卒 法名 雲晴院忠道信士

後柏原院御宇 永正七年近江国武将佐々木弾正定頼相戦之

砌地頭山浅井□完政之為 当国江北猿番場ノ為合戦軍功打死

佐々木弾正定頼之家臣

藤田五兵衛尉

貞長

永正七年庚午四月十三日 法名 海溪清春信士

湖西坂本西教寺石塔建刻

人皇百六代後奈良院御宇 天文五年丙申北之堂観音寺再
建ス 右志之意趣者実父五兵衛尉源貞長依打死為菩提ノ
嫡子後貞孝再建之者也

藤田彦兵衛尉

貞孝

天正八年酉正月廿一日没 法名 嘉翁宗慶禪門

行久

天正十年六月十三日 明智日向守光秀与筑前守秀吉与
山崎合戦之砌藤田伝三行久二千五百余騎之大将ヲ蒙リ
兄弟一所打向奇手蜂屋出羽守ヲ追靡敵数多打取神戸
三郎信孝蜂屋加勢而攻来モ追崩ト雖敵数多味方無勢
也 終深手六ヶ所蒙リ一足モ引ス打死

行政

同六月十四日 藤田伝五行政郎等岡本次郎助其外ノ者共
淀迄引トイヘトモ終自害 岡本ヲ始思々自害ス

貞勝

永禄十二年己巳二月十三日 観音寺涅槃像令新補者也
藤田彦左衛尉

慶長十三年四月十二日卒 法名 了安禪定門

貞光 法名 玄室宗覚禪定門

慶長十九年正月廿七日卒

貞久

寛永五年戊辰十月廿三日没

法名 宗伍

藤田次太夫 江州水保村住

貞堅

寛永九年六月廿四日卒 法名 雲山宗夏居士

(以下、省略)

観音寺(守山市水保町)は明智家の菩提寺である西教寺を総本山とする天台真盛宗の寺院で、今なお伝三行久、伝五行政、彦兵衛尉貞孝を含む藤田一族の菩提を弔っている。永禄一二年に貞孝の子である藤田彦左衛門尉貞勝が寄進した涅槃図(守山市指定文化財)も現存し、裏書には当時の西教寺住持(中興第七世)で開眼導師を務めた真光上人の花押もしたためられる。

〈涅槃図裏書〉

奉寄附涅槃像一幅 近江国

野洲郡秋富郷観音寺常住

右志趣者为梅溪盛春禅定門

出離生死頓證仏果也

施主藤田彦左衛門尉貞勝

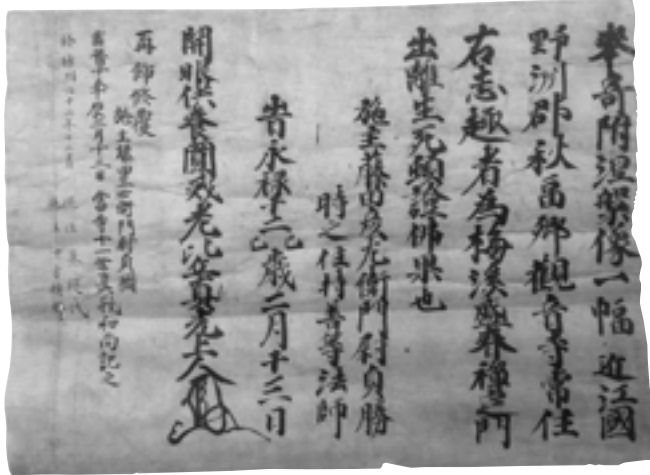
時之住持善等法師

昔永禄十二己巳歳二月十三日

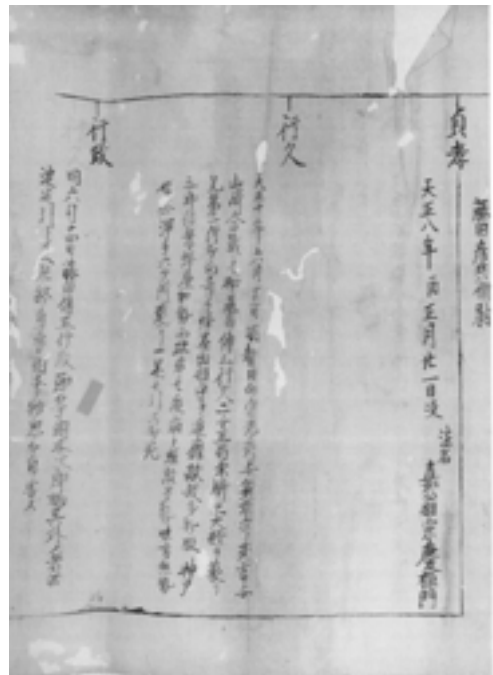
開眼供養円戒老比丘真光上人(花押)

梅溪盛春禅定門(系図では「海」溪盛春禅定門となっているが、寺伝は「梅」で系図の誤りであろう)は、藤田五兵衛尉貞長の戒名である。

伝三行久、伝五行政、彦兵衛尉貞孝の父にあたる貞長の菩提を弔うために、貞長の孫である藤田彦左衛門尉貞勝(一六〇八)が施主となって



観音寺蔵 絹本着色仏涅槃図 裏書



藤田系図 (部分)

寄進したことがわかる。なお、伝三行久は『明智軍記』においては「藤三行久」と表記されているが、守山市藤田家と観音寺で伝えられる通称を採用したい。

観音寺本堂にはかつて、藤田五兵衛尉貞長の肖像画が掛けられていた(寛政一二年成立「観音寺本堂二掛置当家先祖ノ影像表具由来裏書ノ写」『観音寺文書』)ことが知られるなど、寺院再興に最大の功績があった大檀越として藤田家を遇しており、藤田家が戦国から織豊期にかけて近江国に拠点をもち活躍した武家の一族であることに間違いはないであろう。近世中期の作成と見られる藤田家の親類書(断簡)によると、当主・藤田平蔵の実父藤田治太夫は「牧野佐渡守様二馬廻相勤罷在」、祖父の藤田治太夫は「土井大炊頭様二江州御知行所預り支配仕」など、一族の多くが大名の家臣や在地代官などとして仕官する士分の者であったことが知られる(二七)。江戸時代に入っても、水保村の藤田家は名字帯刀を許された郷士層として存在したことが明らかで、その身分の淵源が戦国期の武士であったことに根拠づけられていたこともまた明白であろう。

ただし、「藤田系図」の内容がすべて信用できるかどうかについては、検証する必要がある。率直に言って筆者は、伝三行久、伝五行政、彦兵衛尉貞孝の三人が藤田五兵衛尉貞長の子であったという系譜関係には疑問を抱いている。

藤田家の惣領家における通称の通字は、彦兵衛尉貞孝以降「彦」で、諱の通字は初祖の貞近らしい「貞」である。その中で伝五行政と伝三行久の二人だけが、通称の通字が「伝」で、諱の通字が「行」であるという点については不自然極まりない。系図通りに二人が彦兵衛尉貞孝の実兄弟であったかどうかは、微妙なところである。しかしながら、明智家にゆかりの深い西教寺の法系に連なる観音寺において、伝五らを水保村の藤田一族として供養し続けてきたことは無視できない事実でもある。

ここで想起されるのが、『西教寺文書』の元龜四年五月廿四日付け「明

智光秀寄進状」^(二八)である。元龜四年(一五七三)二月におきた今堅田城攻略戦で討死した一八人の家臣の菩提を弔うため、一人につき一斗二升ずつの霊供米を西教寺へ寄進する旨を伝えた文書である。発給者の光秀が明智十兵衛尉ではなく「咲庵」光秀という号を名乗っている点で他に例がなく、明智家の菩提寺としての近江西教寺と光秀との関係のはじまりを示す重要文書としても知られている。注目すべきは、供養の対象となる討死衆の中に含まれる「藤田伝七」の名である。藤田伝三、伝五の弟と考えるのが自然であろう。人物名の列挙は命日順ではなく、末尾が唯一無姓の「中間」甚四郎であることから、家臣団内部での序列順と考えられる。藤田伝七は一八人中一五人目で序列は高くなく、若年であったこととあわせて、藤田兄弟が元龜四年段階で新参家臣の部類に属したことを示しているのではないか。藤田伝五らは「美濃以来の譜代衆」といったものではなく、明智光秀が近江滋賀郡を領する前後の段階で抱えられた新規家臣である可能性があることを指摘したい。

伝五家と彦左衛門家とは、別家ではあるが近しい同族だったのだろう。ともに西教寺の信仰につらなり、近江に縁があった。明智光秀家臣団の中で出世を遂げ、光秀と運命を共にして滅びた伝五系の菩提を弔うため、もともと同族であった水保村の藤田家では伝三行久と伝五行政を系譜に加え、先祖の一員として供養することとしたのではないだろうか。もともと両藤田家に俗縁がなかったのであれば、わざわざ「謀反人の家臣」を系譜に取り込む必然性などない。

藤田伝五の同族にかかる伝承の要点は、上記のとおりである。近江に伝わる明智家臣団に連なる伝承として興味が尽きない。こうした事例が、今なお続々と発掘されているのである。

まとめにかえて

明智光秀に関する伝説は、滋賀県で生まれた筆者の個人史の中で、幾たびとなく眼前に現れ、かつまたたく間に遠ざかって行ってしまう、捉えどころのない不思議な存在であった。

あるときは「光秀近江出身伝説」について書かれた文献を読み、あるときは父や親族から「光秀は死なず、南光坊天海となり比叡山を復興させた」という物語を聞かされ、またあるときは、担当した展覧会の調査で近世博物学の巨人・木内石亭の祖先が光秀の家臣であったと語る古文書に出会うなど、さまざまな場面で偶然に「明智光秀の伝説」と接触する機会が存在した。そして、その時々では伝説に強い関心を抱くものの、他事に紛れていつしか忘れがちとなり、所詮は伝説であって真正の歴史研究には結びつかぬと捨ておいてしまふのが実態であった。

それが、二〇二〇年の大河ドラマで明智光秀が主人公になるという偶然のおかげで、計らずも、近江に伝わる明智光秀伝説のささやかな記録化を行うことができた。SNSなどで発信された一般の声では、行政が大河ドラマに依存して地域おこしをすることに批判もあるようだが、その是非とはまた別に、ドラマが明智光秀にかかる史実や伝説などについて改めて調査研究を行う機運を盛り上げ、広く文化財の保護に向けた絶好の機会をもたらしたことは確かだと思ふ。

それでは、私たち滋賀県民にとって、明智光秀伝説の意味するものは、一体何であろうか。

かつて滋賀県庁が「文化の屋根」委員会を組織して有識者シンポジウムを開いた際に、明智光秀をはじめ大友皇子、石田三成、淀殿らの名を挙げて「滋賀県は悪人が多い」「悪人研究所を作ればよい」などの意見が出たことがある^(二九)。ここでいう「悪人」とは、顔ぶれからして敗北者、悲劇の人物などを指していると考えられる。主に梅原猛、徳永真一郎と

いった哲学者や作家の発言で、国民一般の見方を代表していると考えてよいだろう。それはまた、筆者自身も含めて、多くの滋賀県人（出身というだけでなく、滋賀県にさまざまな縁をもつ人）が、明智光秀のような謀反人、敗北者、「負け組」側の歴史的人物に対する親近感を強く持っていることを見事に言い当てた指摘でもあった。

日本列島における交通の要衝で、都に隣接する土地柄でもあることから、近江国は歴史上たびたび政治争乱に巻き込まれ、合戦の巷となることもしばしばであった。そうした中で、成功者を輩出する反面、敗北者やその与党・縁者たる「負け組」をあまた生み出したのも近江史の必然であったといえる。私たち近江人は、長い歴史の中でそうした有縁無縁の「負け組」たちに心を寄せ、擁護し、温かく見守る心性をはぐくんできたのではないだろうか。

そうした中で、敗者・光秀は近江ゆかりの代表的人物としてまことにふさわしい。光秀の菩提寺が美濃ではなく京でもなく、近江坂本の西教寺にあり、いまなお一族の供養塔や妻・熙子の墓前に香華が絶えないことにも相応の理由があるのだと、改めて指摘しておきたい。

（いのうえ まさる・滋賀県教育委員会事務局文化財保護課主幹
兼滋賀県立琵琶湖文化館主幹）

註

- (一) 「明智光秀、出生地伝説が続々」〔『朝日新聞』二〇一九年四月二七日 p. on Saturday 四面〕
 「明智光秀 近江出身だった？」〔『産経新聞』二〇一九年九月二四日 滋賀 一二二面〕
 「謎多い武将に新たな光」〔『中日新聞』二〇一九年六月一六日 教育 一五面〕
- (二) 「明智光秀は近江出身？」〔『毎日新聞』二〇一九年七月三十一日 滋賀 二〇面〕
 「光秀 湖国の出身？」〔『京都新聞』二〇一九年八月二日 滋賀地域 二〇面〕
 「近江国出身」文書と口伝〔『岐阜新聞』二〇一九年八月四日 八面〕
 「光秀 近江出身」の新説を打ち出した〔『読売新聞』二〇一九年一月一八日 地域滋賀 二九面〕
 「明智光秀 滋賀・多賀出身？」〔『京都新聞』二〇一九年二月二一日 夕刊 一面〕
- (三) 木下聡「明智光秀と美濃国」〔『現代思想』第四七卷第一六号「総特集明智光秀」二〇一九、青土社〕では、参考文献として拙稿も取り上げ、光秀近江出身の可能性を真摯に検討されている。結論的には、妻である妻木氏を東美濃から迎えていることなどから光秀は「美濃国出身である可能性が高い」としながらも、明智家の惣領争いの中で敗れた頼典か玄宣かの系が近江へと逃れ、明智を名乗る一族として光秀在世時まで存在した可能性を論じている。
- 他に、福島克彦「明智光秀と近江・丹波」〔二〇一九、サンライズ出版〕、大沼芳幸「明智光秀と琵琶湖」〔二〇一九、青海社〕、乃至政彦「信長を操り、見限った男 光秀」〔二〇一九、河出書房新社〕、澤田順子「明智十兵衛光秀 謎多きルーツに迫る 多賀出身説！」〔二〇一九、私家版〕、企画展「明智光秀と戦国の多賀」展示図録〔二〇二〇、多賀町立博物館〕などが、拙稿に触れつつ多賀出身説について述べている。
- (四) 井上優「淡海温故録」における明智十兵衛の正体―光秀は近江で生まれたか？―〔『現代思想』第四七卷第一六号「総特集明智光秀」二〇一九、青土社〕
 井上優「光秀『多賀出身説』を追う」〔『湖国と文化』第一七〇号「特集光秀虚像と実像」二〇二〇、びわ湖芸術文化財団〕
 ふるさと大津歴史文庫5『大津の伝説』〔一九八八、大津市歴史博物館〕 六六～六八頁
 あきつブログ「明智左馬之助 湖水渡りの不思議」〔滋賀県立琵琶湖文化館

- ホームページ <http://www.biwakobunkakan.jp/> 二〇一九年八月九日投稿、
二〇二〇年一月五日閲覧
- (五) 『滋賀県指定有形文化財 聖衆来迎寺表門保存修理工事報告書』(二〇二二、滋賀県教育委員会) 四七～五〇頁
- (六) 彦根藩史料叢書『侍中由緒帳Ⅰ』(一九九四、彦根城博物館) 八頁
四代目清左衛門書出シ之趣
一 右拙者曾祖父木俣清三郎、後清左衛門、次二土佐与申候、生国三州岡崎之者ニ而九歳之比より大権現様江被召仕、拾九之歳子細有之、京都江立退明智日向守方ニ罷在、廿七之比岡崎江被召帰、如元御近習ニ相勤罷在候
- (七) 『寛永諸家系図伝』(『日光叢書寛永諸家系図伝』第五卷、一九九一) 一九七頁
- (八) 『寛政重修諸家譜』(『新訂寛政重修諸家譜』第一五、一九六五、続群書類従完成会) 六九頁
- (九) 高島幸次「近江堅田の土豪猪飼氏について」(『日本仏教史の研究』一九八六、永田文昌堂)
- (一〇) 高島幸次「近江堅田の土豪猪飼氏の近世的変貌」(『龍谷史壇』第九三・九四号、一九八九)、高島幸次「近江における一向一揆と土豪一揆」(『日本の宗教と文化』一九八九、同朋舎)
- (一一) 井上優「木内石亭の出生から分家まで」(企画展『石の長者・木内石亭』展示図録) 一九九五、栗東歴史民俗博物館 三五頁
- (一二) 企画展『石の長者・木内石亭』展示図録(前掲) 一六頁に写真図版、四〇頁に解説の掲載あり
- (一三) 斎藤忠『木内石亭』一九六二、吉川弘文館
企画展『石の長者・木内石亭』展示図録(前掲) 四一頁解説
- (一四) 『信長公記』天正一〇年六月朔日条
六月朔日夜に入り、丹波国龟山にて維任日向守光秀逆心を企て、明智左馬助・明智次右衛門・藤田伝五・斎藤内藏佐、是等として談合を相究め、信長を討果し、天下の主となるべき調儀を究め、亀山より中国へは三草越えを仕候。
(奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』一九六九、角川書店 による)
- (一五) 『明智軍記』第九 藤田伝五并明智治右衛門自害ノ事
藤田伝五行政ハ山崎表右備ノ大将ナリシガ、寄手方ノ蜂屋出羽守ヲ追靡能キ敵余多討捕シ処ニ神戸三七郎信孝、蜂屋ニ入替リ峯信濃ノ守・平田菴岐守等攻来リケルヲモ又追退ケ、気色栄タル処ニ同神戸内国分佐渡守三百計ニテ横鎧ニ廻リ撞掛ル故、味方馬ノ足四度路ニ見ヘケル処ヲ三七殿金ノ杵ノ馬印ニテ自身団ヲ取テ、山路主水鹿伏兔右京ヲ左右ニ立、諸軍ヲ勇メ真先ニ進マレシカバ、藤田モ摩打振、伊勢与三郎・御牧三左衛門・諏訪飛騨守以下相懸リニ懸ツテ肌膚不撓眼瞼不瞬十文字ニ破テ通り、巴ノ字ニ追廻シ鎬ヲ削リ鏢ヲ割、縦横無尽ニ切テ廻リ、天地ヲ響カシ攻戦サレトモ敵ハ大勢ナレバ終ニ打負、藤田伝五ハ痛手薄手ニ六箇所疵ヲ被リ甲ヲモ打落サル、子息伝兵衛秀行・舎弟藤三行久・伊勢与三郎貞伸・諏訪飛騨守盛直ヲ始精鋭既ニ四百七十騎、一足モ不引討死ス、伝五ハ其節額ヲ突レケル疵ヨリ血出テ両眼ニ入シカバ、是非ヲ弁兼、敵ハ何クニ在ゾ、今一軍シテ義死ヲ遂ント云ケルヲ、郎等共藤田方馬ノ口ヲ引テ敵方ヘ掛リヌルト偽リテ、淀ノ辺迄引退キ、偕小橋ノ下ヨリ舟ニ乗、弥落ント支度セシヲ、行政大ニ忿リ、事新キ儀ナガラ武士ノ道ト云ハ生ベキ所ニテハ生、可死所ニテスルヲ以テ忠義トセリ、我手負、眼暗シテ度方ヲ失ヒタレバトテ爰迄落延ベキ様ナシ、郎等ノ所為ニ依テ末代迄嘲リニ逢ン事ノ口惜サヨト、涙ヲ流シ云ケル処、二十四日ノ曙、勝龍寺ノ城ニモ軍有テ三宅藤兵衛綱朝数度切テ出、艶ナル合戦シ其後城ニ火ヲカケ自害シタリト沙汰シケレバ、藤田是ヲ聞テ莞爾ト笑テ、流石気味ヨキ三宅哉、筒様ノ行跡ハ聞モ涼シク思ナリ、然ラバ某モ乍延引自害シテ昨日山崎戦場ノ恥辱ヲ少シ雪クベシトテ、劍ヲ拔左ノ脇ニ突立、右ヘキリ、ト引廻シケレバ、家来岡本次郎介ト云者是非ナク主君ヲ介錯シ、其刀ヲ取直シ己ガ首ヲ搔落シ死ニケルコソ由々敷ケレ
- (一六) 藤田伝五(藤田行政) (本能寺の変で筒井順慶の説得を務めた) (『歴史上の偉人、有名人と子孫の大事典』ホームページ <https://kiroipanda.com/>) 二〇二〇年一月八日閲覧
- (一七) 『親類書』断簡(『藤田泰夫家文書』) 翻刻文は次のとおり

本国

近江国

藤田平蔵

生国

己二貳拾七歳

親類書

一、祖父

藤田治太夫

土井大炊頭様ニ江州御知行所預り支配仕、四拾六年已前

病死仕候、

一、祖母

奥村権兵衛娘

権兵衛儀、京極主膳正様ニ大津蔵役相勤罷在、

七拾四年已前病死仕候、祖母儀拾五年已前病死仕候、

一、養父

藤田平右衛門

大久保佐渡守方ニ相勤罷有、十六年已前病死仕候、

一、養母

藤田弥兵衛娘

弥兵衛儀、津輕越中守様ニ郡代役相勤罷在、貳拾壹年已前

病死仕候、養母儀八年已前病死仕候、

一、実父

藤田治太夫

牧野佐渡守様ニ馬廻相勤罷在候処、病氣ニ付浪人仕、則旧在之

義故江州野洲郡水保村江立帰住居仕、貳拾五年已前病死仕候、

(後欠)

(二八) 藤田達生・福島克彦編『明智光秀〔史料で読む戦国史③〕』(二〇一五、八

木書店) 五三頁

(二九) 『シンポジウム 明日の湖国4』(一九八五、サンブライト出版) 二七―三

〇頁

* 本稿の成立にあたって、藤田泰夫氏、観音寺(篠原啓人住職)および、霞田喜代嗣氏、大西博氏、守山市立速野会館・尾中健一郎氏をはじめとする守山市速野学区ふるさとづくりEプロジェクト関係者のみなさまから、史料の調査やその取りまとめ等について格別の高配を頂きました。

また、昭和五七年の比叡山飯室谷松禅院での石燈籠調査は滋賀県立東大津高等

学校歴史研究部の顧問であった渡邊守順先生の指導のもと、下村隆司氏とともに行ったものです。木内石亭の実家にあたる拾井平左衛門の資料については、考古資料や地学標本などと併せて、平成七年(一九九五)に所有者である拾井正三氏の御自宅において、伊東ひろ美氏とともに調査したものです。

福島克彦氏(大山崎町歴史資料館長)、木戸雅寿氏、仲川靖氏、松下浩氏、大崎康文氏、古川史隆氏、矢田直樹氏(以上、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課)、上野良信氏、志村恵子氏、國分政子氏、和澄浩介氏(以上、滋賀県立琵琶湖文化館)、井上ひろ美氏(文化遺産プランニング代表)、中川敦之氏(栗東歴史民俗博物館)、渡邊勇祐氏(守山市教育委員会文化財保護課)にはご教示と各種の情報提供を頂きました。

なお、滋賀県立琵琶湖文化館の田澤梓氏には原稿の編集・校正等の一切において、格別のお骨折りをいただきました。

多くの関係者に対して、深甚の謝意を表します。